
落としモノ

hidaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落としモノ

【Nコード】

N4537E

【作者名】

hidaka

【あらすじ】

どうにも、最近生きるのが辛くなってきた。何をやっても生き甲斐など感じられないんだ。一体、僕は何をしたら本当の意味で楽しいのだろう？そんな僕が、ちよっぴり不思議な出会いをする……

第1話・駅舎（前書き）

夢か現か、幻か。僕の前に、それらが現れたのは……

第1話：駅舎

僕は今、電車の中。

窓の外の景色が自分の後ろへと一足飛びに去っていく。電車の下からは、ゴトンゴトンという小気味良いリズムが力強く伝わってくる。

窓の下にあるのは、家屋や看板、時々周りの建物の高さから一つ抜け出た高層ビル。さらに、その下を縫うように這いつくばるコンクリート道路。その細い筋に溜まるゴミのような自動車。

ここが、僕のこれまで暮らしてきた世界。

電車は、半時ほど前にはまだ町中にあっただが、気が付けばもう郊外の一風景の中に溶け込んでいる。送電線がちらほらと目立ち始めた。そして、険しい山中へと吸い込まれていき、トンネルを抜けると……

世間の喧騒など何処吹く風、と言わんばかりの麦畑が眼下に広がっていた。

それらを僕はまっすぐに直視する事ができなかった。

そこは、僕にとって眩しすぎる世界だった。

小さい頃、子供の頃は良かった。何かを真剣にやっていたら、楽しかったから。それを深めていけば、真実の喜びを得られると確信していた時期があったから。

最近、自分の底から感じられる喜び、生き甲斐というものを久しく味わっていない気がする。

何をやっても軌道に乗らなく、中途半端。途中で投げ出してしま
う事ばかりだ。

何かをやるうとすると、必ず邪魔が入るんだ。水を差す輩が何処
かにいるんだ。

僕が自分の思った通りに進めようとする、それがちょっとでも
定石を外れていたならば、誰かがすぐにそれを目ざとく見つけて食
つてかかってくる。それが嫌で、周りに合わせてばかりいたら、こ
んどは個性が無いとか、オリジナリティが感じられない、とか冷
たい目しか返って来なくなった。

じゃあどうすれば良いんだ。ちょうど真ん中に行く、なんて器用
な事は僕にはできない。

僕は弱い。

困った時、僕は無意識にまず自分の周りを見渡している。自分で
全てを受け止め、処理する事なんてできっこない。

それに、自分だけに問題があつて、周りには何一つ落ち度は無い
なんて事は無いはずだから。

周りに助けてもらおうとする。

そう言えば少しは聞こえは良い。

けれど、平たく言えば、僕は周りから自分の代わりに責める事
のできる人間を無意識に探しているだけではないだろうか？

そして、都合の良い理屈合わせに見あう証拠を見つけ出そうと、
躍起になっているのではないか？

結局、自分を少しでも庇ってくれそうなものを、血眼になって掘
り出そうとしているのではないか……

その反面、僕は良く分かっているつもりでいる。それがどれだけ
無駄で不毛な事がぐらいは。

はじめはでっかい事を言う癖に、いつも最後は自分の被害を最小

限に抑える事だけしか頭に残っていない。自分の行動が周りにどう評価されるのか、というのが第一になってしまう。

そんな上っ面だけの自分が嫌になる。

そして、最後はいつだっけ自分の声で呟く。

『僕が、もうちょっと強かったらなあ』と。この台詞を、自嘲気味に一字一句違わず唱えてみる。

拳句の果て、そう呟いた自分の声の本心からのものであるかどうかを自問自答してみても、ちよっぴり悲しくなる。

そうしていつも思うんだ。

『これから変わるう』って。そう思わないと、やり切れなくなるだろうから。

そんな事を思っていると、自分の心の中の醒めた気持ちと、無理にそれ鼓舞しつつ起こそうとする気持ちがぶつかり合って、どちらが元にあったのか分からなくなる。

……これ以上、何も思わなくて良い。自分が一番、それは良く分かっているはずだ。

そうあやふやにして思考を閉じた。

僕は、気が付いたらとある古ぼけた木造駅舎の前に立っていた。

自分の周りは、深い霧に閉ざされていた。五里霧中を絵に描いたような場所だった。

つい先程までは、普通に街の中を歩いていたのに。いつの間にか、こんな不可思議な場所に来てしまった。

周りには人の気配が全くしない。

ここまでの道のりはほとんど覚えていない。それどころか、此処が何処にあるどんな駅なのか、駅名すら霧で見えない。

くだらない考え事を道々で考え込んでいたせいなのか、どうにも頭の中にももやがかかっている。

此処は何処なのか？

これは、僕が頭の中で望んで作り出した状況なのか、本当に記憶の中に無いのか。

そう自分に問い掛けてみても、答えは出ない。

だけど…… この駅は、僕の知らない何処かへの入り口になっているような気がした。

ここからなら、僕の知らない世界へと行けるのではないだろうか？ 危なそうだ、と思うけれど。 だけど、何故かあの駅舎の中に踏み込んでいってみたいと思った。

きっかけは、ただのそれだけ。

中に入ってみると、駅舎の中にも薄い霧が漂っていた。

その駅舎内はがらんとしたものだ。時刻表等の置いてある、簡単な机すら無い。 だだっ広い、煤けたフローリングの床が整然と広がっていて、その端に申し訳なさそうに自動券売機が立っている。あとは、小窓がポツリと一つ、隅に申し訳なさそうにあるだけ。

小窓の外を眺めてみても、真っ白な霧の世界しか見えなかった。

とりあえず、夏目様の肖像画を一枚取り出し自動券売機へと向かう。そしてそれを、お釣りが出ないように千円分のプリペイドカードに替えた。その後、誰もいない寂しげな無人自動改札を抜け、その奥へと続く通路に歩を進める。そしてプラットフォームへ繋がっているらしい、崩れそうな階段を一步一步と昇っていく。

怖い、とは感じなかった。

この先に何かがあるのか？　それが、僕の考えている事の全てだった。

もう、これまで僕が住んでいた世界には飽きてしまった。

全くの別世界へ。これまでに背負ってきたモノが全て関係無くなるような世界へ繋がっていれば良い。

そんな非現実的な事だけをぼんやりと祈りながら、階段を慎重に踏みしめて行く。すると、誰もいない、霧に閉ざされたプラットフォームに出た。

そして、ちょうど良い具合にホームに停車していたローカル列車に何の目的も無く、乗り込んだ。

行き先など、何処でも良い。

この先が何処へ繋がっていても、もう構わないんだ。

僕が得たいモノ、それはおそらくこれまでに僕がいた世界では手に入らないモノだろうから。

第2話：後悔、そして始まり（前書き）

列車の窓は煤けた茶色。その窓からの風景は……

第2話：後悔、そして始まり

列車は、まだ次の停車駅に着かない。もう結構時間は経ったと思うのに。

だけど、不思議に恐怖心が全然無い。そして、それゆえに緊張感も無いのだろう。

仕事の事、これまでの自分の普通の生活の事、等々思い出すべき事は山とあるはずなのに、それらを思い出す気力が無い。そしてそれを良しと思っている自分がどつかりと存在しえている。

そうして時間は過ぎていくのだろう。無意識、無自覚の内に。僕がこれまでにそうして来たように……

ところで、ついさっきから、僕はこの列車にどれくらいの間乗っているのだろうか？ とは思うのだが、敢えて重つたるい右腕を上げて腕時計の文字盤を覗く気にはならないのだ。

度を過ぎているのだろうか、今ではさっきからずっとそう思っているがゆえに半ば意地になってきた。そういう妙な、くだらないものだけは持っている僕。

メトロノームのように、規則正しい間隔を刻んで車窓を走る電柱が過ぎてゆく。それをただ、眺めている僕。

普段ならば退屈な筈なのに。

今、こうやって車窓に顔がくつついちゃいそうなくらいに近づいて景色を眺めてじつとしてるのは、悪い気分ではなかった。だからこそなのかもしれない。時計を見る気にならなかったのは。

偶然、ふらりと見つけた駅で、ちょうど良いタイミングにプラットフォームにいたから乗った。それだけのこの電車。

それから車内ではばらく待っていると、アナウンスもなく唐突に列車は駅を出発した。

その後は少しずつ速度を上げながら、かと思うと、列車はあつと

いう間に外の景色の一要素としてその風景の一部に溶け込んでいった。

その後、どれくらいの時間だろうか？ 僕は、車窓に映る眩しすぎる景色にすっかり圧倒されていた。それから今はようやく立ち直りつつある。

空は、真っ青ではない。所々で屯している雲だつて、真っ白ではない。全体で空を大きく捉えてみると、色調としてはモノトーンに近いのかもしれない。そんな事を思いながら。

そして、ただひたひたと、どこぞとも知れぬ山々の間を縫って単調な眺めの中を列車は進んでいく……

……ん？ ふと、気持ちの何処かで、何かが燻っている感じがした。

ふと何気なく、窓の外の眺めから自分の事へと関心を移してきた。軽い気持ちで、胸に手を当ててみる。

すると、僕の中の何かが唸った。いや、叫んだのか？ それに呼応して、鳥肌のような小さな震えが己の四肢から徐々に腕の肘の辺りに集まってくる。それらが重なり合つて、気が付けば腕がガクガクと大きく震え出していた。

僕は、一体何をしているんだ。……なんて馬鹿な事をしているんだ。

どうして、どうなったつて良い、なんて考えたんだ。僕はそこまで絶望的な状況に陥っていた訳じゃ無かったのに。

皮肉な事に、それに気付いた時、ようやく肘の辺りの震えが落ち着きだした。自分が今まで冷静で無かった事を初めて悟った。

まず思った事は自分の愚かさだった。浅さだった。

ただ、僕は自分が可愛かっただけじゃないか。

心の中で愚痴を散々捏ねまわしている内に、自分だけ被害者ぶつて。周りをちゃんと捉えられなくて。

そして、自分の中で適当に話をまとめていく内に辛くなって。

その果ての拳句が、勝手に自暴自棄になって。

僕が得たいモノ、か……　もしかしたら僕は、単に何か大儀そんなものを心の中で捻くり出して、それを盾に現実逃避したかっただけなのかもしれない。

これから僕はどうすれば良いんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4537e/>

落としモノ

2010年10月9日01時26分発行